



きょうようときょういくのままに ⑰

紙、デジタル教科書、TTTI

東京学芸大学名誉教授 篠原文陽児

新たな年明け。イノシシ年。5月には平成から新元号に変わる年。マスメディアや情報通信網を通じ、日本国民のみならず世界中のすべての人々に、特別な記憶として刻まれ残るに違いない年の始まりである。

鬼が笑う、いや、昨年のことであるから、鬼が泣くか。時は昨年11月、大学の図書館からの帰り道。1960年代から70年代の教育に関する書籍や資料を求めるようむきで、世界有数の古書街に、いく。

所は、去る3月の、事故のトラウマの引き金になった現場近くの交差点の一角。左手正面には〇〇文庫、〇〇新書と書かれた看板。右手前角には銀行。そして、その一つ隣が、〇〇ブックセンター。何と、その看板には、書店名の上にカフェの文字。今や、古書店であっても、書籍のみでは、客足がままならないのか。あるいは、探し物や掘り出し物を、時間をかけて、手に取り目で確認した上で購入するか否かの判断をして欲しいとの、客に対する店主の計らいか。結果的にはこれに答え、筆者は、店内と店先に積まれた白、黄、赤茶など、歴史の重みを感じさせる数々の色の紙の書籍を、手に取り見て読んで2時間余り、お目当ての1冊をゲット。

そういえば、東京駅に隣接する大型の書店でも、また、決して大型とはいえないまでも、当協会近くの地下鉄の駅を地上に上がった正面のビルの脇の書店でも。店内には軽食など販売コーナーが設けられ、店の構えに見合った椅子とテーブルが、用意されている。書店の新しいカタチであろう。

書店といえば、2017年5月時点で、全国に、約1万2千店。2000年と比べると40%強も減少し

ているという。ネット通販の普及で、わざわざ書店に出かけることもないということか。Webサイトに組み込まれたレコメンド機能によって、ユーザーの好みにあった書籍や商品の情報が届けられる時代のうねり。筆者も、書店通いや図書館通いに加え、こうした情報を利用することが多くなってきている。店内の棚から書籍等を手に取って見るというよりも、画面で、眼に取って見る、ということか。

学校教育法が昨年5月に改正され、紙の教科書を主な教材に、教育課程の一部においてデジタル教科書が併用できるようになった。特に、視覚障害や識字障害などで紙の教科書による学習が困難な児童生徒は、すべての教育課程でデジタル版の使用が認められる。朗報である。また、デジタル版は音声や動画も扱えるため、特に、英語や理科での理解促進につながるという。L.J. クロンバックとR.E. スノーが1977年に著したATI（適性・処遇交互作用）が脳裏に浮かぶ瞬間である。教科書の特性を加味すれば、TTTI（特性・処遇・課題交互作用）である。2015年のある調査では、デジタル教科書と紙の教科書の併用を望む声が90%を超えている。まっとうな調査結果であると、合点。

一方で、デジタル教科書の活用には、保護者の費用負担、視力、睡眠、デジタル依存など健康への悪影響が懸念されている。決して忘れまいと誓う。

新たな年の始め。感性と理性を結びつけ認識をより深く豊かにし、個性的で創造的な質の高い教授学習と教育。これらに貢献する歴史ある視聴覚教育の基礎、基本を、鋭敏なスコープを携え、猪突猛進ならぬ、腰を据えて考える一時ではある。